9・30 事件とサラワク独立政体の挫折

松 村 智 雄†

The September 30th Incident and the Failure of an Independent Polity in Sarawak

Toshio Matsumura

This paper examines how the September 30th Incident in Indonesia affected the plight of Chinese on both sides of the border in Sarawak and West Kalimantan. This historical episode can be traced back to the early 1960s, when the northern part of Borneo Island（Sarawak, Brunei and the North Borneo）was undergoing the process of decolonization. The people in the region were seeking independence, and opposed to being integrated into the Federation of Malaysia. However, the British authority established Malaysia on September 16th, 1963.

After the September 30th incident, the communist movement in Sarawak started losing support both domestically and internationally（especially support from Indonesia）. Eventually, most of the guerrilla fighters gave up their struggle in 1974. Nevertheless, even in the persecution by Suharto's army, the Sarawak guerrillas and the Indonesian Communist Party in West Kalimantan cooperated in their struggle for several years after 1965. Although international and national politics in Indonesia and Malaysia were already oriented toward anti-communism, communist activities in West Kalimantan and Sarawak did not disappear immediately because of the remoteness of these areas from the centers of the nation-states（Malaysia and Indonesia）.

はじめに

1960 年代前半は，ボルネオ 3 邦（北ボルネオ North Borneo[1]，サラワク Sarawak，ブルネイ Brunei）の政治の季節であった。イギリスからの脱植民地化をいかにして達成するかについて，宗主国のイギリス，すでに独立していたマラヤ連邦[2]，ボルネオ 3 邦はさまざまな利害対立を抱えながらその道筋を模索した。

1963 年 9 月 16 日に成立したマレーシア連邦はイギリスによる地域秩序構想が反対派を押しのけて実現された[3]。しかし，インドネシアのスカルノ（Sukarno）は，連邦結成以前からマレーシア構想は

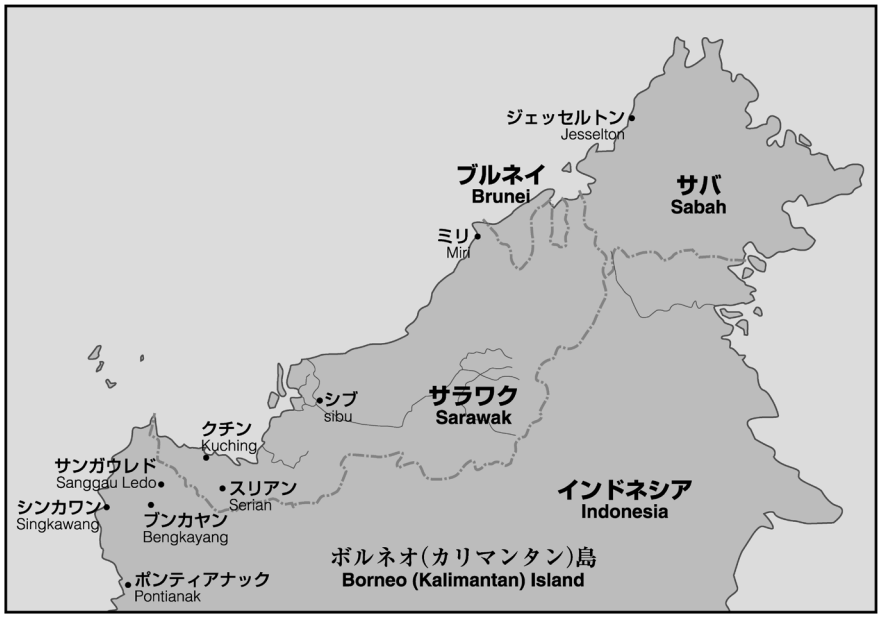
---

† 早稲田大学アジア太平洋研究センター助手

1「北ボルネオ」の呼称は 1881 年に始まるイギリス北ボルネオ（勅許）会社の統治領域の名称である。この領域がサバ（Sabah）と呼ばれるようになったのは 1950 年代以降のことである［山本 2006: 26–29］。

2 1940 年代から英領マラヤの独立構想はあったが，1950 年代にはマレー人の特権か平等な市民権かということをめぐって争いがありなかなか決着しなかった。1957 年にイギリスとの交渉を経てマレー半島部（シンガポールを除く）がマラヤ連邦として独立を果たした。さらに 1960 年代に入るとマラヤ連邦にシンガポール，ブルネイ，サバ，サラワクを含めて連合するマレーシア連邦構想が登場する。

3 1970 年代に発表されたマッキー（J. A. Mackie）による研究［Mackie 1974］においてはマレーシア構想に際してマラヤ連邦首相のアブドゥル・ラーマン（Tunku Abdul Rahman）の意向が重要であったという見解を発表していたが，その後 1990 年代のイギリス公文書の公開に伴い，イギリスがマレーシア地域構想に積極的に関わっていたことが明らかになってきている［鈴木 2003］。



北ボルネオ略図

イギリスによる実質的な再植民地化であるとしてこれに強硬に反対しており，それにもっとも明確に同調したのが，中国語教育を受け，中国大陸の共産党による「解放」を支持するサラワクの華人であった[4]。彼らのうちの一派は，1963 年のマレーシア連邦成立前後からサラワク及びサラワクと国境を接する西カリマンタンにおいて，インドネシア軍の支援を受けてゲリラ活動を展開していた。よって，1965 年 9・30 事件後のスカルノの失脚がもっとも直接に影響を及ぼしたのもサラワクであった。本論文は，ボルネオ 3 邦の中でも特に，マレーシア連邦結成（1963 年）以降もそれに反対する共産主義ゲリラ活動が勢力を持ったまま継続したサラワクに焦点を当て，彼らの活動背景，9・30 事件が彼らの活動にどのような影響を与えたのかという問いに答えるものである。

さらに，もうひとつの重要な考察対象は次である。サラワクと接するインドネシア領西カリマンタンでは，9・30 事件以降，インドネシア共産党の勢力がジャワやバリといった地域でスハルトの軍隊によって次々と壊滅していく中においても，軍の勢力が及ばず，現地の華人社会の支援を受けて共産主義活動が継続した点が挙げられる。サラワクゲリラ自身も自らの出身地サラワクにおいて，マレーシア政府からの弾圧に耐えかねて西カリマンタンに逃げ込んだ。そこには，すでに，新中国の影響を受けて，共産主義活動に理解のある華人のコミュニティーの支持に加え，1966 年 3 月 12 日に非合法になった後も西カリマンタンで地下活動をしているインドネシア共産党との共闘が可能であった。サラワクゲリラには西カリマンタンは活動の舞台を与え，インドネシア共産党西カリマンタン支部はサ

[4] 華僑・華人の区別に際して，中国国籍を保持していることをもって華僑，居住国国籍を保持していることをもって華人というように分類することがあるが，本論文が取り上げる時期のサラワクでは，中国系住民は頻繁に中国との間を行き来し，しかもサラワクの政治活動にも積極的に関わっていたため，国籍によって区別せず，中国にルーツを持つ人々の総称として華人の語を用いる。

ラワクゲリラの勢力に 9・30 事件以降も期待し活動するという「持ちつ持たれつ」の関係が成立したのである。

これが完全に崩壊するのは，後に見るように 1967 年にインドネシア国軍が内陸部の華人社会を根こそぎに壊滅させる作戦を実行してからである [5]。その後，彼らは活動の基盤を失い，サラワクゲリラはサラワクに戻り，西カリマンタンのインドネシア共産党は，その後の住民との協力にも失敗しつづけ，勢力を急速に弱めていく。

興味深いのは，9・30 事件は，インドネシア全般で言えば，共産主義勢力に対する決定的な打撃を与えたのは確かであるが，インドネシア国内であっても西カリマンタン州においては上記のサラワクゲリラのサポートと地元華人の支援により，これは決定打とならず，1967 年には一時勢力を盛りかえした点である。このようなことがどうして可能であったのかについても述べる。

さて，マレーシア形成に反対して活動した人々は「北カリマンタン（中国語表記で北加里曼丹，英語表記は North Kalimantan）」という呼称を用いた。北カリマンタン統一政体構想とは，サバ，サラワク，ブルネイが統合して，イギリスの息のかかっていない新しい政体を作るという地域構想であった［盧 2012: 2］。ここで彼らがボルネオの語を用いていなかったのは，それがイギリス植民地支配による呼び名であり，「北ボルネオ」と言えば，現在のサバを指すイギリス植民地支配の行政用語であったためであろう。そもそも，マレーシアにおいて，現在に至るまで「カリマンタン」という呼称自体がこの用法の他には存在しないことを鑑みると，当時のインドネシアへの共感をもって，「ボルネオ」ではなく，インドネシア側の呼称である「カリマンタン」を用いたのだと推測される。そもそも，ヨーロッパの勢力が入ってくる前にはもともと自由な民衆のものであった地域をイギリス植民地主義が分断したという認識がその根底にはあり，植民地主義がまかり通った時代が通り過ぎても，それは形を変えて（スカルノが「ネコリム（Nekolim＝新植民地主義 neo-colonialism）」と呼んだものである）存在し続けるため，そこから人民を解放するという思想がその背景にはある。このように「北カリマンタン」もイデオロギー性を帯びた地域概念なのである。

彼ら新植民地主義に抵抗する人々にとって，スカルノの存在は巨大であった [6]。もちろんサラワクの左派運動で中心的役割を果たした文銘権（Wen Ming Chyuan）や黄紀作（Bong Kee Chok）[7] といった指導者の思想の支柱にはマルクス・レーニン主義，毛沢東思想があり［盧 2012: 7］，1950 年代に中国に渡りそこで学問を修め，中国の国家建設に貢献しようという華人も多数いた［王 2013: 256–282］[8]。しかし，実際的に彼らの活動をもっとも強力に支えたのはスカルノであった。

---

[5] 西カリマンタンからサラワク西部にかけては，18 世紀中ごろにさかのぼることができる金鉱開発に携わった華人社会（主に客家人）が内陸部まで展開していた。

[6] 9・30 事件前夜までのインドネシアとサラワク共産主義運動の接点を見ていくと，そこにはアザハリがおり，彼を媒介して，彼らの運動が接続していたようである。しかしいかなる経路を経て，サラワクにスカルノの考え方が影響力を及ぼすようになったのかは自明ではなく，これは今後追求すべき課題である。ただ，原によると，サラワク解放同盟（1950 年代から活動していたサラワクの自主独立を目標に掲げた団体）は，文銘権ら幹部を 1963 年から 66 年の間ジャカルタに派遣して国際統一戦線工作にあたらせ，その際にブルネイ反乱後にインドネシアにいたアザハリと密接な関係を築いたという［原 2009: 162］。

[7] 標準中国語の読みでは，黄紀作は huang ji zuo（ピンイン使用）であるが，彼が客家の出自であるため，現在に至るまで客家語の読みが一般的に用いられている。

[8] サバにおいては，国民党支持者がかなりの勢力を持っていた［山本 2006: 235–260］。これはおそらく，サバのサンダカン（Sandakan）に国民党支部が置かれており活動を続けていたことと関係があるだろう。サラワクの場合には大多数の親中国の教育を施す学校を通じて圧倒的に中国共産党支持者の数が膨れあがることになった。

スカルノがインドネシアで実権を握っていた時期には，ボルネオ3邦独立への希望は大いにあり，マレーシア連邦が成立した際にも，これに堂々と抗議し，武力闘争を展開していた。しかし，9・30事件は，彼らの活動にとっては大きな痛手であった。1966年に，スカルノが推進していた「マレーシア対決策」が撤回され，スカルノがそのためにサラワクと国境を接するインドネシア，西カリマンタンに派遣していた部隊に代わり，スハルトの命を受けた反共色の強い部隊がこの地域に導入された。このインドネシア軍の総入れ替え以降，インドネシア国軍のゲリラ掃討作戦が過激さを増してくると彼らは退却を余儀なくされた。サラワクゲリラは，1967年7月，逆転を図るためにインドネシア国軍基地を襲撃するが，その後，西カリマンタンを管轄するタンジュンプラ12師団とジャワから派遣された反共の特殊部隊（具体的には陸軍空挺部隊 Regimen Para Komando Angkatan Darat（RPKAD），スハルト体制期の数々の秘密軍事作戦を実行した特殊戦力部隊 Kopassus の前身）がゲリラ追撃に総力を注ぐようになるため，それによって彼らの運動は打撃を受けた［Davidson and Kammen 2002］。

ただ，ジャワのように9・30事件以降，速やかに共産党組織が壊滅したのではない。9・30事件以降もインドネシア共産党西カリマンタン支部は活動を続け，サラワクゲリラとの共闘を続けた。このインドネシア共産党西カリマンタン支部は，ソフィアン（Said Achmad Sofyan）が，貧困の中にある華人社会への働きかけを強めたことで，1960年代初めに急成長したものである［Davidson and Kammen 2002: 59］。しかし，1969年初めには共闘関係も解消され，西カリマンタンでも彼らは孤立していった。

サラワクにおいては，指導的立場にあった黄紀作（Bong Kee Chok）が，1973年10月にサラワク州政府と和平協定を結び，同月中に彼の指揮下の主要部隊が降伏した。州政府はこの和平協定の後に，スリアマン（Sri Aman）作戦と呼ばれる降伏呼びかけを行い，1974月7月までにゲリラの大部分が降伏した。その後も残って活動し続けた180名ほどは1990年まで山野にこもりゲリラ戦を展開した［原 2009: 172–173］。彼らは多くの自伝や回顧録を出版しており，そこには彼らの闘争の時代の悲喜こもごもが語られている[9]。本論文ではこれらの回想録や元ゲリラに対するインタビューも資料として利用するが，彼らの認識を絶対視することなく，親マレーシアの立場から書かれた雑誌記者によるレポート［Tan 2008］，サラワクのゲリラ掃討に実際に関わったインドネシア軍人の回想録［Hendropriyono 2013］なども活用しつつ，①サラワクの独立政体を目指す活動の背景，②9・30事件がサラワクのこの運動にどのような影響を及ぼしたのか，また③9・30事件でスカルノという強力な支持者を失った後も彼らの活動が比較的長い間継続したのはなぜか，という問いに答える。

1. ボルネオ3邦独立政体構想の概要

ここでは，各地域の1960年代前半における政治動向について概観する。

1-1. サバ

サバは1881年より，北ボルネオ会社というイギリスの勅許会社によって統治され，植民地期は英

[9] 参考文献に一部挙げている『友誼叢書』と呼ばれる一連の出版物である。

領北ボルネオ（British North Borneo）と呼ばれていた地域である。カダザン人，ドゥスン人などの現地民の他，主に客家系の華人が多く，その他フィリピンやインドネシアからの移民も多い。

1960 年代前半のサバについては山本博之の脱植民地化過程に関する研究が存在する［山本 2006］。サバの脱植民地化過程に重要なはたらきを果たしたサバの民族主義者，ドナルド・ステファン（Donald Stephans）はオーストラリア人と北ボルネオの現地民の一つであるカダザン人（Kadazan）の混血であった。ステファンは，北ボルネオの独立後のマラヤ連邦との協力は支持するものの，北ボルネオがマレーシアの一州として吸収されるのに反対であった。将来独立する際には，隣国のサラワクやブルネイとともに連邦を結成し，北ボルネオはその連合の枠組みの中で自治州として独立を実現すべきであるとしていた［山本 2006: 73–76］。

さらにステファンは，北ボルネオ，サラワク，ブルネイのボルネオ 3 邦を越えた地域協力，各邦が自治権を持ちながら中央政府を持つ単一の連邦国家を構想していた。ところが，イギリスは強硬に「サバ人のためのサバ」を主張するステファンに対して，北ボルネオにマレーシア成立後の自治の度合いについてかなり譲歩することによって，ステファン取り込みに成功した［山本 2006: 272–278］。

1-2.　ブルネイ

ブルネイは，16 世紀ごろから，ボルネオ島北部からフィリピン南部まで覆う一大王国を築いたが，1888 年以降，イギリスの保護領となっていた。民族構成はマレー系 65.8%，華人 10.2%，その他 24.0%である [10]。

さて，ブルネイでは，1960 年代にどのような脱植民地の運動があったのであろうか。このテーマについては，最近発表された鈴木陽一の論文が多くを説明している［鈴木 2015］。ブルネイのスルタン・オマール・アリ・サイフディン 3 世（Sultan Omar Ali Saifuddin III）も民衆も当初はマレーシア連邦に反対であった。スルタンがマラヤの民主主義的な政治手法に警戒したのである。しかしながら，国内ではアザハリ（Sheik A. M. Azahari）のブルネイ人民党（Parti Rakyat Brunei, PRB）が勢力を増し，それはインドネシアという強力な後ろ盾を持っていた。そのため，この危険なライバルの向こうを張るためにマラヤとの連合を考えたのである。このような時期，1962 年 12 月にアザハリは，国内の大多数を支持者とともに親マレーシアの国王に対する反乱を実行し，共和国の成立を目指すのであるが，これは，イギリス軍に弾圧されてしまう。これ以降，ブルネイのイギリスへの依存はますます強まり，イギリスの保護領として残ることになる。むしろ英軍が反乱鎮圧後に駐留し続けたことで，英軍に王国を守ってもらう路線が定着したのである［鈴木 2015］。

ただ，ブルネイ反乱以前の 1962 年選挙では，アザハリ率いるブルネイ人民党は圧勝し，立法評議会 33 議席のうち，民選議員 16 議席全部を獲得した［鈴木 2015］。彼らはインドネシアとの協力のもとに北カリマンタン統一国家を目指していた。マラヤ連邦政府は，スルタンではなくアザハリを交渉相手とし，ステファンに対して行ったように彼の取り込みを画策した。しかしアザハリは，イギリスやマラヤ連邦の思い通りにはならなかった。ブルネイ人民党は，シンガポール，マラヤ連邦の野党，さらには後述するサラワクのサラワク人民連合党（Sarawak United People's Party, SUPP）という反

[10] http://www.mofa.go.jp/mofaj/area/brunei/data.html にある日本外務省のデータによる（2015 年 11 月 23 日閲覧）。

マレーシア政党とも共闘していた。アザハリ自身，インドネシア独立革命期にインドネシアへ渡り，独立革命期の政府と強いつながりを持っていた。隣国インドネシアの力を借りて，北カリマンタン独立へと邁進していたのである。ところが，1962 年反乱の失敗によりブルネイの反マレーシア路線は消滅した［鈴木 2015］。

ブルネイ国内では反マレーシア勢力は消滅したのであるが，サラワクではこれ以降，スカルノがますます後押しを始めた結果，反マレーシア巻き返しを図るために活動が活発化した。インドネシア国軍は西カリマンタンで，サラワクの青年に軍事教練を施した。マラヤ連邦が，このようなインドネシアの関与を非難すると，インドネシアのスバンドリオ外相（Soebandrio）は 1963 年 1 月に「対決（konfrontasi）」政策を表明しインドネシアとマレーシアは戦争状態に入る［原 2009: 104–105］。スカルノが中国に傾斜し，マレーシアと対立するこの状況は，ベトナムと並んで冷戦構造がこの地域に持ち込まれたとも言える。

1-3. サラワク

ここで本論文の主な記述の舞台となるサラワクについて簡単に解説を加える。サラワクのおおよその人口構成は，先住のイバン人 30%，華人 25%，マレー系 24%，その他 21%である［岩見 2012: 2］。サラワクには，19 世紀まで，いまだにブルネイ王国の勢力が及んでいない地域が多かったが，イギリス人ジェームズ・ブルック（James Brooke）は，この地域のブルネイ国王に対する現地民の反乱を鎮圧したことでスルタンからラジャ（Raja，王の意）の称号を得た。これに対して不満を持ったブルネイの王族がブルックに対して反旗を翻すと，ブルックはイギリス軍の助けを借りて反対勢力を制圧し，1841 年にサラワクの統治権を得ることになる。その後，日本統治期に入るまで，3 代にわたってブルック家による統治がサラワクで展開された。

1960 年代の英領の脱植民地化の過程において，イギリスは，親イギリスの政党を自ら現地に作り彼ら主体の国づくりをすることで，自らのその地域における勢力を維持しようとした。そこで複数の御用政党が 1950 年代末に誕生することになる。その一つとしてサラワク人民連合党（Sarawak United People's Party, SUPP）があった。ところが，この政党には，1950 年代の中国式の教育を受けた華人が参加するようになった。最初，この政党の支部から徐々に彼らの勢力が力を持つようになりイギリスも危惧を募らせた［田村 1988: 10–11］。前述のようにサラワクの華人人口は 25%に上り，華人のプレゼンスが高い。彼らは，1950 年代から新中国の思想的影響下に，脱植民地化運動に関わるようになり，サラワクの民意を介しないマレーシア構想に断固反対を主張した。

2. 先行研究

1960 年代のサラワクの政治過程の概要については，［鈴木 1998, 2001］，［田村 1988］が参考になる。また，特にサラワクの左派運動に関するまとまった先行研究には原不二夫の著書［原 2009］およびポリットの著書［Porritt 2004］がある。しかし，原，ポリットの研究は，左派運動の推移自体に興味の中心があるために，イギリス政府，マラヤ連邦，サラワク国内の各政党が複雑に絡み合っていた政治過程についての分析は少ない。また，左派運動とサラワク民衆との関係についても必ずしも明らかにされていない。

サラワクの脱植民地化については，イギリスの地域構想の文脈で多くの先行研究が存在する。この時期はスカルノの「対決」政策の最中であり，これを主題とした研究の中には必然的にサラワクの脱植民地化問題は取り上げられることとなった。この分野の古典は 1970 年代に出版されたマッキーの著書［Mackie 1974］である。ここではマラヤ連邦の策略に重点が置かれている。すなわち，1961 年にマレーシア連邦構想が出てくる背景にはシンガポール問題があり，マラヤは共産主義運動が勢力を広げるシンガポールをマレーシア連邦に受け入れるのに際して，その緩衝剤としてボルネオ 3 邦も共に連邦に組み込むことを，マラヤ連邦のアブドゥル・ラーマン（Abdul Rahman）が画策したとしている。しかし，その後イギリスの公文書が公開されるにつれ，イギリスがかなりの程度，この地域の地域構想とその実現に直接関わったことが明らかになった。これを踏まえた研究に［Easter 2004］，［Jones 2002］，［Subritzky 2000］がある。これらはイギリスの直接の関与を強調したものであり，前掲の鈴木の研究も同じ系列にあると言える。鈴木は，マレーシア連邦を 1940 年代から続いていたイギリスによる脱植民地化政策の一環として位置付け，ラーマンによる構想提唱は，シンガポールやイギリスに促されての結果であり，イギリスの帝国政策がその背景として存在していたとする。ただ，これまで包括的にサラワク国内の政治過程を分析し，それとイギリス，マラヤ連邦やインドネシアのの間の国際関係も含めて論じたものは管見の限り存在せず，まだまだ詳細について追究すべき課題は多い。また，当事者の左派ゲリラが出版している書籍は多数存在するが，ここからは全体像が得難い。

また，西カリマンタン側も 9・30 事件以前から，そして事件以後もサラワクゲリラの活動範囲となっており，彼らの重要な会議は西カリマンタンの各地で開かれているほどである。西カリマンタンの政治的コンテクストにおける，サラワクゲリラの西カリマンタンでの活動と，9・30 事件以降過激化するインドネシア国軍によるゲリラ追討作戦について述べられた論文には［Davidson and Kammen 2002］がある。また，特に 1967 年に起きた内陸部からの華人追放事件に関しては独自の内陸部での調査により，インドネシア国軍と協力して華人を追放したダヤク人社会の論理から研究した［Tanasaldy 2012, 松村 2015］がある。

筆者はこのような研究状況の中で，主にサラワクゲリラ関連の一次文献及び彼らに対するインタビューを用いるが，インドネシア側の軍人が書いた回想録やマレーシア連邦形成過程について多くの政府要人に随行した記者のレポートも参照する。利用した主な史料・口述資料の特徴を簡単に次に紹介する。

［林 2010］は，インドネシア領西カリマンタン出身でサラワクの左派組織との共闘を行った西カリマンタンの元インドネシア共産党員による回顧録である。また，サラワクでゲリラ活動に参与した人々は，2000 年代になって，往時の「北カリマンタン革命」の意義について議論し，自己の経験を綴った回顧録を『友誼叢書』という名のシリーズやその他の単行本として出版してきた［蔡 2000，幹 2009，莉 2003，盧 2009，羅 2003，揚 2010］。しかし特に本論文で利用する［盧 2012］は，北カリマンタン人民軍の指導者の一人，盧友愛が編者として自身も多くを執筆しているが，これまで出ていた『友誼叢書』の決定版という色彩を持っており，その他の友誼叢書のどれよりも情報が豊かであり，包括的である。

［Hendropriyono 2013］は，インドネシアの軍人，ヘンドロプリヨノ（A. M. Hendropriyono）による回顧録である。中ジャワのジョクジャカルタに生まれ，インドネシア国家情報局長を務めた経歴

がある彼は，西カリマンタンへは1968年から赴任し，当時西カリマンタンで展開されていたサラワクゲリラ掃討作戦の詳細な実行過程について記述している。

また，［Tan 2008］は，サラワクの政治家との関わりが強く，その重要な局面に直接接した記者ガブリエル・タン（Gabriel Tan）によるレポートである。彼は一貫してマレーシア連邦形成に賛成の立場を持っており，サラワク左派の反マレーシア運動を冷静に分析しようという姿勢がうかがえる書物である。その他，新聞の資料としてはシンガポールで発行された『星洲日報』を利用する。

また筆者は，2013年12月に，ゲリラ活動に以前参加した人々が企画した学術セミナー（シブで開催）に参加したが，その際に，彼らが9・30事件およびスカルノ大統領についてどのような意見を持っているか自由回答形式のインタビューを行った。このインタビュー結果も適宜利用する。

その他，サラワクの元ゲリラ隊員と，インドネシア共産党西カリマンタン支部で活動していた人々は，9・30事件以降，主に西カリマンタンを中心として共闘した経験があり，ほぼ毎年，持ち回りで様々な場所で集会を開いているが，筆者が参加した2011年の2月バンドゥン（Bandung）での彼らの集会の際に行ったインタビュー結果も引用する。こちらでは，主にに，西カリマンタン側から参加した人々の意見が聞かれた。

3. マレーシア連邦形成への道のり

3-1. 1950年代のサラワク

前述のようにサラワクの人口構成を見ると25％と華人の人口比率が高く，彼らが，唯物史観に基づいて，旧体制を打倒した「新中国」の建国を支持するという状況が1950年代にはあった[11]。中国共産党を支持する新聞が多数発行され，学校教育でも社会主義思想が普及した。1960年には，非華人の識字率が17％であったのに対し，華人の識字率は54％にも上った。彼らが知識人青年層を構成したのである［田村 1988: 9–10］。

サラワクの左派運動は，抗日戦争の時代に活性化し，戦後1954年のサラワク解放同盟（Sarawak Liberation League, SLL）に結晶化した［原 2009: 160］。イギリスは，この運動に警戒するようになり，共産主義関連書籍の禁書処分，中国語学校への制限を強める［劉 1992］。サラワク華人の左派活動が活性化し，1959年にサラワク人民連合党がイギリスの調整によって結成された際には，このように政治的に覚醒した青年たちは積極的に政党政治に参入した。イギリスは，植民地政府と協力する政党結成を望んで，市評議会の有力メンバーであり商工会の有力者でもあった華人に働きかけたのである。党の主導権を握ったのは，商工会の華人，イバン人であったが，党の支部レベルを支えたのは共産党組織であった。当時のサラワクは，サバに比べ主要な産業が少なく，経済は停滞し失業率も高かった［田村 1988: 10］。このような背景があり，それ以前からサラワク解放同盟に参画していた知識人青年は，2500人規規模となり，彼らは多くの党員を募ろうとしていたサラワク人民連合党に参加した。イギリスは共産主義が広がっているのは支部だけだと見込んでいたが，共産党勢力はその後

[11] 劉子政の1950年代のサラワクの華人社会に関する研究書に掲載されている人物の例をひとつ挙げよう。黄声梓は1920年11月11日に中国福建省で生まれ，1986年5月4日にインドネシア西カリマンタンのポンティアナックにて66歳で死去した。彼は7歳のとき，父に連れられて香港を経由してシンガポールを経て，サラワクのシブ（Sibu）に来，ゴム栽培をしていた。小学校で中国語を学習し，1946年，26歳のときに中国の大学で学ぶ。その後サラワクに戻ってきて1952年4月1日シブの「詩華日報」を創刊し，中国共産党支持を明らかにして活動する［劉 1992: 132–133］。

も拡大し，サラワク人民連合党を合法的政治母体としてマレーシア構想に反対し，デモやストライキを頻繁に行うようになった［田村 1988: 11］。党結成したのはイギリスであったものの，サラワク人民連合党は，マレーシア構想に最後まで反対する唯一の党となった。

3-2. イギリスの対抗策

サラワク人民連合党勢力は日増しに強力になったため，イギリスはこれに対抗する政党を結成する。ブルック時代に優遇された一部のイバン人と共産主義の拡大を危惧する華人を主体とするサラワク国民党（Sarawak National Party SNAP）が結成された。中心となったのは，ブルネイの石油会社に勤めていたステファン・カロン・ニンカン（Stephen Kalong Ningkan）であった[12]。サラワク国民党もマレーシア連邦に反対し，「サラワク人のためのサラワク」を主張していた。その他，マレーシア構想支持のもとに，ムスリム政党であるサラワク国家党（Parti Negara Sarawak），サラワク国民戦線（Barisan Ra'ayat Jati Sarawak, BARJASA）が相次いで結成された［田村 1988: 11］。

このようなサラワクにおける政党政治の曙の時期に，特にサラワク人民連合党を母体として活動していた共産主義運動の指導者に文銘権と黄紀作がいる。文銘権は 1932 年サラワクのクチン（Kuching）[13] 生まれでクチン中華中学在学中に社会主義活動に参加し，1954 年にサラワク解放同盟が結成された際には指導的立場にあった。その後サラワク人民連合党（SUPP）のリーダーでもあった。同じくサラワクに生まれた黄紀作は文とともに 1962 年にイギリスによって中国に送還されるがその後インドネシアに入国し，ブルネイ反乱失敗後インドネシアに移住していたアザハリと出会い，インドネシア政府の要人とともに，インドネシアと協力してマレーシア連邦反対運動を推し進めることになる［原 2009: 159–193］[14]。

3-3. マレーシア構想に際して

マレーシア構想がアブドゥル・ラーマンによって提唱された 1961 年，サラワク人民連合党のリーダー王其輝（Ong Kee Hui）と，ブルネイ人民党のアザハリがサバのジェッセルトン（Jesselton）のドナルド・ステファン宅に集まり，マレーシア連邦構想について協議している。その後彼らは，「トゥンク・アブドゥル・ラーマンによってブルネイおよびサラワクで発表された見解と一致するいかなる計画も，3 邦の人々には完全に受入不可能である」とする北ボルネオ，サラワク，ブルネイの共同声明を出す運びとなった［山本 2006: 271–272］。その後シンガポールで開かれた会合では，シンガポールのリー・クアン・ユー（Lee Kuan Yew）の支持も取り付けている［山本 2006: 271］。そこで一貫して強調されていたのは，マレーシア連邦について議論する上で，ボルネオ 3 邦の人々の民意が反映されるべきことであった［山本 2006: 271］。

これを受けてイギリスは，ボルネオ 3 邦に対する民意調査団を派遣し，調査を行う。これが，元英国銀行総裁コボルト卿（Cameron Cobbold）リーダーとして結成されたコボルト調査団（1962 年 2

---

[12] ニンカンは華人とイバン人の混血で，サラワクがマレーシアに統合された 1963 年から 66 年の間，サラワク州の首相を務める人物である。

[13] クチンは後のサラワク州の州都となる町であるが，ブルック王家の統治時代から政治経済の中心地であった。

[14] 原によると特にこの動きに積極的に関与したのはスバンドリオ（Subandrio）である［原 2009: 166］。

月から4月にかけて派遣）である。また，このコボルト調査団による，ボルネオ3邦の住民がマレーシア参加に同意しているという結果を不服としたスカルノ，さらに，サバの領有権を巡ってマレーシア構想に異議を唱えるフィリピンのマカパガル（Diosdado Macapagal），また，マレーシア連邦形成を推進中の，マラヤ連邦のアブドゥル・ラーマンは，1963年8月，フィリピンのマニラで会議を開き，そこで彼らは国際連合による公正な調査を求めた［Ishikawa 2010: 86］。この要請に応じて，国際連合も民意調査団を同月に派遣することになったのである。

まず，コボルト調査団であるが，この民意調査は，北ボルネオ，サラワク，ブルネイの複数の都市と村落で690団体及び4,000人の個人との非公開のインタビューを通じて行われた。また各地に窓口を作って，意見文書の持ち込みを歓迎したため，各地の党組織が意見書を持ち込んだ。結局，コボルト調査団の報告書は，北ボルネオとサラワクの人々は3分の1がマレーシア連邦形成に無条件賛成であり，3分の1が宗教や言語の問題で自治権の保証を獲得するという条件付きで賛成，3分の1は反対（独立か，そうでなければイギリス領に留まる）というものであった［山本 2006: 304–305］。

結論として，サバやサラワクの州の権利を認めなければならないが，しかしマレーシア連邦は有益で魅力的な計画であり，ボルネオ住民にも利益になるだろうとしているとし，北ボルネオとサラワクは必要な保証を獲得した上で，マレーシア連邦に加わるのが最善という結論を出している［田村 1988: 13–14，山本 2006: 304–305］。

前述の過程を経て，1963年8月には国連調査団も派遣された。この2回にわたる調査団に同行した記者ガブリエル・タンはその際の経験に基づいてレポートを書いている。コボルト調査団がシブを訪れた際，反マレーシアの看板，立札，垂れ幕が各地に存在しており，シブ（Sibu）とミリ（Miri）では，コボルト調査団に対して攻撃的なデモが起こったという［Tan 2008: 55–58］。コボルトの他，イギリス植民地統治の要人が参加したこの調査団は各地で反マレーシア，親マレーシアの両勢力に出会った。ガブリエル・タンは1962年3月16日にシブにいたときのことをこう綴っている。

> シブの町は反マレーシアのポスター，横断幕で埋め尽くされていた。若い人たちがこれを作っていたがだれもこれを止められない様子であった。サリケイ（Sarikai）では，意見を表明した政治組織のうち，ひとつのみが親マレーシアであり，17がマレーシア連邦反対であった。クチン近くのスリアン（Serian）では，大勢のデモ隊がマレーシアに反対を訴えたプラカードを掲げていた［Tan 2008: 57–59］。

翌年，マレーシア連邦結成が間近に迫った1963年8月に派遣された国連調査団が各地を訪れた際にはさらに過激なデモの標的となった。この国連調査団は，アメリカ人，ローレンス・ミッチェルモア（Laurence Michelmore）をリーダーとしており，彼はウ・タント（U Thant）国連事務総長の代理として参加した。この調査団にも同行したガブリエル・タンは，クチンの群衆の「我々にはマレーシアはいらない，マレーシアはクアラ・ルンプルによる支配を意味する（We do not want Malaysia, Malaysia means control by Kuala Lumpur）」という掛け声を記録している。投石もあり，中国語，英語，マレー語の横断幕が各地に掲げられていた。シブではイバンを含む群衆が「スカルノにイエス，トゥンク（アブドゥル・ラーマン，筆者注）にノー，マレーシアにノーと言おう（Sukarno yes,

Tunku No. No to Malaysia)」と叫んだ。また華人青年たちが調査団の車を襲撃し，団員が暴行を受けた。彼らはミリにおいても投石や催涙弾を用いた攻撃に見舞われた。デモ隊は，攻撃を受けないように，年配の女性や子供たちを前列に立たせて後方から攻撃したのだという［Tan 2008: 61–64］。

3-4. マレーシア成立

1963 年 9 月 16 日，マレーシア連邦が成立する。その後インドネシアはますます，マレーシア対決政策を硬化させる。そして，インドネシアはマレーシアを粉砕するためにゲリラ戦を仕掛けていくのである。その実行に当たり反マレーシアで共闘することになったのが，ブルネイ反乱に失敗したアザハリおよびサラワクの共産主義者であった。ブルネイ反乱後，アザハリは，ジャカルタで北カリマンタン統一革命政府（Pemerintah Revolusioner Negara Kesatuan Kalimantan Utara）を樹立し，インドネシア政府及びサラワクの共産主義者の共闘をインドネシア領内で進めた［原 2009: 167］。主要な戦場は，サラワクとインドネシア領西カリマンタンとの国境地帯であった。その後，インドネシア政府の肝いりによって，サラワク青年主体のゲリラ部隊が結成されることになった。その名はサラワク人民遊撃隊（Pasukan Gerilya Rakyat Sarawak, PGRS, 中国語名は砂拉越人民遊撃隊）（1964 年結成），北カリマンタン人民軍（Pasukan Rakyat Kalimantan Utara, PARAKU, 中国語名は北加里曼丹人民軍）（1965 年結成）であり，前者は，サラワク西部および西カリマンタン（この場合は活動地域がサンガウレドやブンカヤン一帯）で，後者はサラワク東部および西カリマンタンの内奥部の国境近くで活動するようになった［Davidson and Kammen 2002: 55–58］。

4. マレーシア連邦とインドネシアの狭間の左派運動

4-1. イギリスによる反対勢力の弾圧

イギリスは，このようにインドネシアの後ろ盾を得て国境地帯で活動する青年たち，またそれに関わろうとする人々の母体となっているサラワク人民連合党の党員，支持者に対して，地区の役人による個別の説得，言論，集会の制限を行う一方，「危険人物」を取り締まった。結果，マレーシア成立までに多くの人々が，反マレーシアの活動に参画しているという理由で逮捕された。イギリス，マラヤ連邦両政府は，マレーシア成立に合意したサバ，サラワクの自治権などを話し合うために政府間委員会（Inter-Governmental Committee）を結成し，コンセンサスづくりに奔走するが，その後もサラワク人民連合党のみがマレーシア連邦に強硬に反対し続けることになる［田村 1988: 15］。

サラワク青年の間に積極的に反マレーシア連邦に関わる人々が拡大していくのは，1962 年 12 月のブルネイ反乱後であった。ガブリエル・タンは，ブルネイ反乱ののち，青少年がサラワクの都市から消えたと書いている［Tan 2008: 131］。彼らはインドネシア領内に入り，インドネシア軍が軍事教練を彼らに施した。1962 年 6 月 22 日，サラワク人民連合党のリーダーの文銘権と黄紀作は中国へ国外追放となるが，2 人はインドネシアの西カリマンタンに潜入し，インドネシア政府と共闘を進める。そして，1965 年に入ると散発的にイギリスの警察署などの襲撃事件が起こる。1965 年 6 月から 9 月までにイギリス当局は 200 の共産主義者を逮捕している［Tan 2008: 150］。イギリス警察は，逮捕者への説得を試みるが，彼らの中には友人に誘われて参加しただけというような，どのような目的で活動している組織なのか分かっていないのに参加していた青年も多くいたということである。彼らは，

学生運動の熱気にうかされるようにして参加していたのである。逮捕された後，自らの行いを自省した青年はラジオ・サラワク（Radio Sarawak）[15] に出演し，出演者によってさまざまな言語（福州語，客家語，標準中国語等）で，これまでの行為を後悔しているというメッセージが放送された［Tan 2008: 151］[16]。

また，ラジオ・サラワクはイギリス政府の宣伝メディアとしても重要な役割を担ったようである。ガブリエル・タンが挙げているメッセージには例えば，「どんどんあなたも年を重ねる（いつまでやっているのか），おじいさんは病気でいる。春節には家に帰ろう！」というものがある［Tan 2008: 151］。その他ラジオ・サラワクが握っていた重要な役割には，後述する 1965 年以後サラワクで建設された新村（New Village）での規則の変更，例えば外出制限の解除，再開などについて，生活に必要な情報を流していたというのがある［Tan 2008: 152］。ガブリエルによると，農村から消えた若者は，野生動物を追い払うために実家にあったショットガンを持って逃げたほか，インドネシア軍から武器提供を受けた［Tan 2008: 169］。

4-2. インドネシアのサラワクゲリラ支援

インドネシアの軍人，ヘンドロプリヨノは著書の中で「我々（ここでは組織としてのインドネシア国軍であり彼自身ではないと思われる，筆者注）が愛情をかけて育てた人を殺害しなくてはならなかった。自分で育てたものを自分で破壊しなくてはならなかった」と述べている［Hendropriyono 2013］。この意味は，スカルノが政治勢力を持っていた時代においては，インドネシア政府の命で，国軍はサラワクゲリラに軍事教練を施していたが，スハルトに権力が移ってから，国軍はこれまで訓練していたサラワクゲリラを敵に回して活動しなくてはならなくなったことを指している。

1965 年段階では，インドネシア政府とサラワクゲリラの関係は最も密接になっており，その中で西カリマンタン州の州都ポンティアナック（Pontianak）におけるリーダーの会議により，北カリマンタン共産党が正式に立ち上がった。これは 1965 年 9 月 19 日であり，9・30 日事件が目前に迫った時期であった。この会議の後，文銘権はアザハリ夫妻とともに中国に行った。これは 10 月 1 日国慶節式典に参加するためであった。しかし，9・30 事件が起こったことで，文銘権はその後サラワクに戻ることはなかった［盧 2012: 97–98］。これについては後述する。

4-3. 新村政策

過激化する国境地帯のゲリラの活動に接して，イギリスはゲリラ活動地域から，一般民衆を引き離し，彼らを監視下に置く新村を築いた。新村はマレー半島部においては，1950 年代にマラヤ共産党の勢力から一般の華人民衆を引き離し，共産党勢力を孤立させることを目的に築かれたものである。また，この作戦は，後にアメリカ軍が，戦略村としてベトナム戦争における対ゲリラ戦でも利用した

[15] ラジオ・サラワクは 1954 年 6 月 7 日に成立し，短波を用い，英語，マレー語，中国語，イバン語で放送をしていた。

[16] ラジオを，空中からばらまくビラと共にゲリラの投降を呼びかける手段として用いる手法はすでにマレー半島部で非常事態宣言が出された 1950 年代初頭においてイギリスが取った手法であった［木畑 1996: 206–207］。

ことが知られている［木畑 1996: 188–189］。これがサラワクにも導入されたのである[17]。その契機は 1965 年 6 月 26 日にクチンの警察署がゲリラ組織に襲撃されたことであった。それに際して，ハンマー作戦（Hammer Operation）という新村政策が採られた。これについては前述のヘンドロプリヨノの著書にも記述があり［Hendropriyono 2013: 172］，ガブリエル・タンのレポートにも登場する［Tan 2008: 24–33］。また，その他，シンガポールの星洲日報記事でサラワクの新村特集もなされている[18]。

これらの記述を総合すると，このハンマー作戦は 1965 年 7 月 6 日に開始され，最初は 7 月 15 日から 25 日までの外出制限であったが，その後次々と方針が出され，華人をひとつの場所に集住させ，共産主義勢力の影響力を受けないようにする政策であったようである。当初は一時的な措置であったが，その後永続的な新村になった。クチン周辺に新生村（Siburan），来拓村（Beratok），大富村（Tapah）という 3 つの新村が建設された。この過程には，60 人ほどの公務員，400 人の警察官，1,000 人以上の軍人が動員されたようである。もとにあった学校の建物に収容され，その後順次家屋が増設された。この新村は 1980 年まで軍の監視下に置かれた。この間，8,000 人（1285 世帯）がここに住んだという。厳しい出入り制限が課され，軍隊と警察が常駐していた。イバン人の伝統家屋である一つの長い建屋（ロングハウス）に集住していた人々も家屋を出て，新村に住むことを強制されたという［Tan 2008: 24–33］。

4-4. シンガポールの離脱

ボルネオ 3 邦の活動はマレーシア連邦結成後，ほぼスカルノのみが頼みの綱であったがシンガポールの動向にも彼らは注意を払っていた。もともとシンガポールは左派勢力が強く，リー・クアン・ユーも彼らを取り込みながら政治活動を展開していた。またシンガポールの南洋大学はマレー世界における中国の進歩思想の牙城として多くの左派活動家を生み出してきた大学であった。このような性格を持つシンガポールが 1965 年 8 月にマレーシア連邦から離脱したことに，サラワクの左派活動家は期待を寄せた。シンガポールがマレーシア連邦側からこちら側に戻ってきて，その持前の左派勢力の強さから力添えを得られると見込んだのであった［盧 2012: 327］。しかしながら，リーはサラワクのこのような期待を裏切り，国内の左派勢力の弾圧を行った。この後南洋大学もそれまでの思想的背景を脱色され，英語大学としてのみ存続を許された［田村 2013］。また，マレーシア連邦に参加していたサバは，シンガポールのマレーシアからの離脱を見て，自身もマレーシアからの離脱を試みた。シンガポールがマレーシアから離脱すれば，ますますマレーシア内でのイスラム教徒の影響力が強まることを懸念したためである。しかしイギリスは，もしサバまでが離脱すれば，イギリスはボルネオを将来にわたって防御しないとして牽制し，サバの引き留めに成功した［鈴木 2001: 142］。

シンガポールは 1965 年の独立以降，中国共産党との関係を抹消し，国内の左派が壊滅したため，サラワクにとっては，シンガポールのリーにも見放される形となった。サラワクの活動家にとっては，ますますスカルノのみ頼るものがないという状態に追い込まれていったのである。そして，これ

[17] マレー半島の新村についてはフィールドワーク，聞き取りに基づいた研究が存在する［村井，東條 2011］。しかしサラワクの新村についてはまだ研究の蓄積が乏しい。また，新村政策については，この後西カリマンタンにおいて 1967 年にマレーシア軍とインドネシア軍の共同作戦が展開された際に，インドネシアの例としては珍しく新村が築かれた例があるがその前例としてこのクチン近郊に築かれた新村があったことは確かであろう。

[18] 星洲日報『新村今昔系列』2001 年 8 月 7 日，8 日，9 日。

にとどめを刺したのが9・30事件であったのである。

5. 9・30事件の影響

サラワクの共産主義ゲリラ組織，北カリマンタン人民軍の主要リーダーの一人であった盧友愛はその著書［盧2012］の中で，9・30事件の影響について次のように述べている。少し長くなるが，北カリマンタンのゲリラ組織の9・30事件に対する理解を代表しているものと考えられるので，ここに引用してみたい。

> 世界を震撼させた9・30事件は，インドネシアだけでなく，東アジア，東南アジアの政治にとっても重要な事件であり，その影響は大きかった。1945年にインドネシアが独立してから，スカルノは世界の民族解放の巨人であった。しかし9・30事件以降，スハルトの右派グループによる歴史に逆行する行為が起こった。国際的には彼らは，西側帝国主義に追随するものであった。国内では彼らは，狂信的な極端な反共，反革命，反人民，反華人政策を取り，共産党員と革命の支持者に対して大虐殺を行った。
>
> （中略）
>
> 我々北カリマンタンとインドネシアは密接な関係がある。インドネシアの政局の変化は，北カリマンタン革命武装闘争にも甚大な影響を与えた。インドネシアの9・30事件はサラワク人民の革命武装闘争に大挫折をもたらしたのである。
>
> （中略）
>
> 最初は，我々にとって唯一の敵は，イギリスの帝国主義であった。しかし，1963年にマレーシア連邦が誕生してから，我々は2つの敵と立ち向かうようになった。それはマレーシアの封建官僚グループである。そして1965年9・30事件の後には，インドネシアの右派反動勢力とイギリス・マレーシア反動勢力が和解し，我々北カリマンタン革命勢力はますます孤立した。
>
> （中略）
>
> 特に，インドネシア共産党，サラワク革命武装勢力と西カリマンタンの民衆，特に，華人群衆との連絡を絶つために，スハルトファシスト右派集団は，1967年9月15日から，ダヤク族を利用して，多くの華人を殺害した。これは20世紀のもっとも悲惨な虐殺事件であった。その事件ののち，我々はインドネシア領内での闘争を続けることができず，全部の武装勢力をサラワクに戻すよりなかった。サラワクに戻ってから，農村での民族工作に力を入れたが，功を奏さなかった。
>
> また，インドネシアの政局が急変する直前，北カリマンタン革命組織の最高指導者である文銘権が中国に行き，北カリマンタンには戻ってこなかった。これにより我々は，団結の核心となる指導者を欠くこととなった。これは武装闘争の失敗の一因である［盧2012: 104–105］。

ここでは，9・30事件が「北カリマンタン革命」にとっていかに大きな痛手であったかが明確に述べられている。また，西カリマンタンの華人が1967年にインドネシア国軍に教唆されたダヤク人に追放されたことにも言及し，この後，いよいよサラワクゲリラは西カリマンタンでの活動が継続できなくなりサラワクに戻ったが運動は下火となってしまったこと，また，9・30事件によって，最高指

導者である文銘権を失ってしまったことを失敗の一因としている。

また筆者が 2013 年 12 月に行った元サラワクゲリラ構成員への自由回答形式のインタビューを行った際に聞き取った情報は次である。彼らは「中国は精神的にはサラワクの共産主義運動を応援したが，物質的，軍事的に彼らの活動を支援したことはなかった」と述べ，「むしろ彼らの後ろ盾は中国というよりもインドネシアであったので，インドネシアのスカルノ大統領が継続すれば，状態は変わっただろうに」とスカルノの支持の重要性を指摘した [19]。

9・30 事件がサラワクゲリラに与えた直接的な影響に，それまでゲリラ組織を率いてきたリーダーである文銘権が中国に行ったきりサラワクに戻れなくなったことがあったことは先の盧友愛の著書の引用部にもあったが，リーダーシップを欠いたゲリラ組織は，その後分裂をし，幹部間の対立が表面化し，それがゲリラ組織を弱体化させた。原によれば，文は 1965 年 9 月 28 日にジャカルタを離れ中国に行くが，9 月 30 日にインドネシアで政変が起きて，文は中国共産党対外連絡部にサラワクに戻りたいといったが中国共産党側は危険なで戻らない方がよい，と勧告したため戻らなかったという［原 2009: 176］。その後文銘権は，サラワクの指導者とはごくたまにしか連絡せず，指導の中心を失った国内の革命はきわめて困難となったという。このことは，ゲリラ活動に参加していた当事者からも聞かれた。文銘権については，現在の段階での元サラワクゲリラの批判は厳しい。文銘権は中国から戻ってこなかったが，彼が戻ってきていたら変わっていただろうと述べる一方で，彼の無責任さに失望したという発言も多く聞いた。またほとんど連絡が無かったため，実質的な指導者とは呼べない，また，文銘権が中国に行ったことでゲリラ組織内と統率がとれなくなり仲たがいも生じたことが強調されていた [20]。盧友愛によれば，文はサラワクに戻ってこなかったが，重要局面では手紙で適切な指令を出していたと述べている [21]。しかし，文の不在によってゲリラ組織が被った影響は多大であったのは確かであろう。実際，その後，ゲリラ組織内での内紛があり，インドネシア共産党との共闘路線がしばらく取られるがそれも長続きせず，統制がとれていなかった。そしてその中で，1973 年から翌年にかけて，黄紀作がサラワク州政府と協定を結び，彼の指令で彼につき従う大勢おおよそ 500 名（ゲリラ全体の 75%）が降伏した［Cheah 2009: 149］。9・30 事件は，マレーシア結成から徐々にその活動領域を狭められてきていたサラワクの左派活動の残り火を構造的に消滅させた。その後，まだ彼らの抵抗は続くが，もはや国際関係の構造は彼らの活動を支持するものではなくなっていたのである。

1965 年 10 月 1 日未明に起きた，インドネシア軍内のクーデタ未遂事件と逆クーデタの影響が，サラワクゲリラの活動するインドネシア領西カリマンタン領に及ぶには時間を要した。また，スカルノ時代のマレーシア対立政策は 1966 年 8 月 11 日まで継続していたため，マレーシアとインドネシアの各国の国軍が協力して国境地帯で活動するゲリラを制圧することができなかった。この両軍の空隙にまだまだゲリラが活動する余地が存在した。特にインドネシア領内の西カリマンタンにおいては，スカルノ時代の軍配置がそのまま存続し続けていた［Davidson and Kammen 2002: 57］。そのため，

[19] 愈詩東，謝水源，王莫華へのインタビュー，シブ，2013 年 12 月 22 日。

[20] 愈詩東，謝水源，王莫華へのインタビュー，シブ，2013 年 12 月 22 日。その他に，文銘権が今も生きているというが，香港などにチケットを買ってやるというなら行くが，こちらから出向こうとは思わない，どこに住んでいるかはどうでもいいことであるという突き放した発言も聞かれた。

[21] 盧友愛へのインタビュー，シブ，2013 年 12 月 21 日。

これらの軍と西カリマンタンのインドネシア共産党勢力，およびサラワクゲリラがまだ活動する余地が残されていたのである。9・30 事件以前より西カリマンタンを統括していたのは，タンジュンプラ第 12 師団（Komando Daerah Militer XII Tanjungpura）であった。この師団を統帥したのはリャクドゥ（Ryacudu）であり，彼とインドネシア共産党勢力とは近しい間柄であった。これは，この時点では国と国の関係はすでに変化していたが，国境を越えたローカルなつながりが残存した例として興味深い。リャクドゥが更迭され，西カリマンタンの軍配置の総入れ替えが起こるのは，マレーシアと和解してからさらに時を経た 1967 年 6 月 29 日であった。この時にジャワから，反共色が強く，スハルトの支持の厚い，バンゥドンに根拠地を置くシリワンギ師団（Siliwangi）が導入され，主導権を握ったのは，ダルルイスラム運動（Darul Islam）鎮圧[22]，スマトラのインドネシア共和国革命政府（Pemerintah Revolusioner Republik Indonesia, PRRI）制圧[23]に功績のあったウィトノ（Witono）であった［Davidson and Kammen 2002: 61］。ウィトノが西カリマンタンの軍系統を掌握したのちに，本格的にインドネシア軍とマレーシア軍のゲリラに対する足並みのそろったゲリラ掃討作戦がはじめて可能となったのである。

この間，サラワクゲリラ及び西カリマンタンのインドネシア共産党勢力はどのように行動していたのであろうか。1966 年 3 月 11 日以降，ますますスハルトが政治の実権を握ることが明らかになると，西カリマンタンインドネシア共産党支部は，反スハルト政権，スカルノ支持を掲げて武力闘争路線に入った［林 2010: 70］。そして活動は 1967 年に入るとますます活発化し，1967 年 7 月には，マレーシア，インドネシア国境近くのサンガウレドにあるインドネシア国軍基地を急襲し，武器弾薬を奪うことに成功する。この国軍基地急襲作戦は，西カリマンタンのインドネシア共産党勢力とサラワクゲリラの共闘組織によるものであった［林 2010: 68–71］。

しかし，この後，インドネシア軍とマレーシア軍は徹底したゲリラ掃討作戦を展開するに及び，西カリマンタンにおいては，先住のダヤク人を教唆して，内陸部の華人社会を消滅させるという過激な方法によってこの目的が遂行された。短期間のうちに約 6 万人の華人が内陸部の故地を追われ，西沿岸部のポンティアナック（Pontianak）やシンカワン（Singkawang）へ強制的に移住させられた［Davidson and Kammen 2002］[24]。その後，サラワクゲリラと西カリマンタンのインドネシア共産党勢力との共闘も 1968 年には解かれ，インドネシア共産党勢力は孤立し，サラワクゲリラはインドネシア領内から引き揚げてサラワクに戻った［原 2009: 69］。これまでインドネシアこそが彼らが比較的自由に活動できる領域であったのであるが，9・30 事件後，インドネシア軍のゲリラ掃討作戦がますます厳しいものになっていった結果，そこにも踏みとどまることができなくなったのである。

6. 西カリマンタン共産主義勢力から見たサラワクゲリラの存在

西カリマンタン共産主義勢力にしてみれば，サラワクゲリラの支援（主に軍事訓練）は，活動を継続する上で必須のものであった。そこで，筆者が行った西カリマンタン出身者へのインタビューと関

[22] 1950–60 年代，インドネシア共和国をイスラム国家とすることを目標に掲げた中央政府に対する反乱であり，この時代国内の大きな不安定要素となった。

[23] 1958 年，スカルノの左傾に反対した政治家がスマトラ島中部に位置するブキッティンギ（Bukittinggi）を本拠地に定めて結成を発表した臨時政府であるが，すぐにインドネシア正規軍に鎮圧された。

[24] この事件をダヤク人の側のポリティクスの面から考察したものとして［松村 2015］がある。

連資料，先行研究を軸に特に，西カリマンタンの共産主義勢力からみたサラワクゲリラの存在について，9・30 事件以降の動向を詳しく述べてみたい。

サラワクゲリラの方の回想録では，実は 9・30 事件についての記述は実は少ない。また，一部西カリマンタンとの共闘がこの後進むものの，結局 1967 年がピークであり，その後，彼らはサラワクに撤退し，この時点でサラワクゲリラとしては，インドネシアを見限った。しかし一方，西カリマンタンのゲリラは，スハルトの軍隊に直接直面することになったのである。9・30 事件以降の情勢について，サラワクゲリラの証言や記述の中には上記のような抽象的なものしか登場しないため，ここでは，西カリマンタン出身で，この活動に参加していた人々の語った内容，彼らの著書の記述に拠って，9・30 事件以降の情勢について考察する。この点は，西カリマンタンがサラワクゲリラの活動の重要な地域であったことから言っても重要である。

また，興味深いのは，彼らの語る内容とサラワクゲリラの語る内容の間にある「温度差」である。サラワクゲリラにとっては，西カリマンタンはあくまで外国であったのに対し，彼らと共闘した西カリマンタンのゲリラ（インドネシア共産党勢力）にとってインドネシアの政治動向は自らの属する国家の問題であり，自国の公正のためにスハルト打倒を掲げて戦っていたため，いくら共闘していたとはいえ，戦う目的が微妙にずれている。サラワクゲリラのスカルノに対する見方も，外国の大統領として彼らを支援しているので，確かに理念上あるいは形式的には「痛手」とは言っているが，しかし，スカルノ失脚の衝撃と失望は，インドネシア出身の西カリマンタンの活動家の比ではないだろう。彼らの当事者意識は次のような西カリマンタン出身の活動家へのインタビュー結果にも表れる。そこでは，サラワクゲリラのそれよりも，スカルノに関する見方が厳しい。

> スカルノは民族主義者であり，彼は祖国とその人民を愛していた。彼はナサコム（Nasakom, ナショナリズム（Nasionalisme），宗教（Agama），共産主義（Komunisme）のインドネシア語の単語 3 語を元にしてスカルノが使っていた合成語であり，この 3 者を統合するという政治的スローガン：筆者注）によって，国民を団結させようとした。しかし一方でスカルノは，共産党を利用して，自分の政治的ポジションを確保しようともした。結局，自分の利益を追求し民族全体の利益を忘れた。それで保身のために，9・30 事件以降，スハルトを即座に除くことができなかった。自分の利益があったからである。彼に対して軍人が反対して，自分の地位が揺らぐのが怖かったからである。海軍，陸軍，空軍にも共産党メンバーは勢力を持っていたのでありスカルノが指示を出すのを待っていたのである。その時にスカルノは何もしなかった。そしてスハルトは小規模な軍隊によって，インドネシアを変えてしまったのである。反動派の意見を真に受け，そのために多くの共産党員が犠牲になったのである。それは，彼の資産階級特有の定見のないパーソナリティーの故であった[25]。

サラワクゲリラよりも，より自らに迫りくる危険を察知していたからであろうか，スカルノは，理想は語ってもいざというときに潔くない，彼は行動が伴わなかったために自分たちの運動は破壊され

[25] 匿名インタビュー，西カリマンタン出身ゲリラ参加経験者，バンドゥン，2011 年 2 月 5 日。

てしまったのだ，という意見である。一方で，そのようにいざというときに歯切れの悪いスカルノに対して，毛沢東に関しては，「毛沢東がインドネシア共産党のもっともよい友であり，彼は全力でインドネシア共産党を支持した。毛沢東こそが国際主義者である」というように述べている[26]。サラワクの人々が，毛沢東は特に支援は無かったし，スカルノが頼りであったというのは正反対であるが，スカルノの出方がより自らの身の危険に影響してくる西カリマンタンでの活動家ゆえのことであろうか，スカルノに対しては手厳しい。またサラワクの人々にとっては，西カリマンタンは外国であるのに対して，西カリマンタンのゲリラは，自らの国家「インドネシア」のために戦っていたのであり，そのためにスカルノにたいする失望もそれだけ大きかったのではないか。

6-1. 西カリマンタンにおけるサラワクゲリラの活動（西カリマンタンのインドネシア共産党との共闘）

西カリマンタンにあった自生的な秩序は，1960 年代初めからサラワクの共産主義者，インドネシア共産党の活動が盛んになるにつれて，外部の政治の影響を強く受けるようになった。その結果，この地域は国内政治，国際政治に組み込まれ，結局 1967 年に内陸部の華人社会の全体的な追放という事件にまで発展していくのである。その過程についてここでは見る。

インドネシア共産党西カリマンタン支部の活動に参加した林世芳によると，9・30 事件の発生直後，共産党首領のソフィアンは，スカルノ大統領の指示を仰ごうとしていた。当初彼らは，9・30 事件は軍部内の権力闘争であり，しばらくしたら収まるであろう，という見方をしていた。しかし，ますます状況は悪くなり，多くの左派組織関係者は投獄された。ソフィアンと副指揮の陳武侠は，もはやスカルノは政治的権力を持っていないということを悟り，地下活動に入った。そしてスハルト政権反対の運動を展開するようになった。ジャワでは早期に共産党が壊滅したため，それを隣国サラワクの共産主義運動との連帯で，インドネシアの共産党の巻き返しを図るものであった［林 2010: 68］。

特に彼らが活動の拠点としたのは，西カリマンタンの内陸部であった。まだインドネシア軍部の手が及んでいない地域であり，比較的安全であった。彼らの言葉を用いれば，「内陸部に潜んでいれば，カリマンタンの他の地域，北カリマンタンとも連携できるため，これで体力を温存し，反撃に出るという策略であった」という［林 2010: 69］。この当時からしてみれば，スハルトがその後 32 年間も間盤石の体制を築くということは当時の人々は知りえなかったのであるから，まだまだ今後の巻き返しに期待を寄せたというのも理解できる。サラワクゲリラにとっては，インドネシアはまだまだ楽園であった。サラワクゲリラはよく当時西カリマンタンに入ってきて活動をしていたことが分かる証言も聞かれる。華人が集住しているシンカワンのような場所には早期からサラワク出身あるいは西カリマンタンのゲリラがよく入ってきて訓練をしたり寝泊りをしていた。当地は 1950 年代から，中国共産党支持者が多く，このような営みを許容，あるいはそれを積極的に支持する雰囲気があった。シンカワンのインフォーマントである阿強（A Khiong）によると，スカルノ時代にまだ存在していたシンカワンの中華公会の建物には，1965 年当時，ゲリラが寝泊まりしていた。そのような公認の施設に堂々とゲリラが寝泊まりしている，華人の有力者はそれを知っている，という状況は特筆すべきであろう[27]。特にシンカワンやポンティアナックのように高等教育を受けた華人が多い地域，そして，ブ

[26] 匿名インタビュー，西カリマンタン出身ゲリラ参加経験者，バンドゥン，2011 年 2 月 4 日。
[27] 阿強へのインタビュー，シンカワン，2011 年 12 月 28 日。

ンカヤンやサンガウレドのような同じく左派の影響が強かった地域は，サラワクゲリラにとって格好のシェルターとなったのである。

9・30 事件のあと，サンガウレドの空軍基地に駐在する軍人はスハルト派に変わったという。そしてこのインドネシア軍人たちは好き勝手の行動をしていた。林世芳の記述によると，壊れた時計と胡椒を交換させる，農民が育てた農作物，家畜の略奪，華人の家に入り恫喝し，賃金を支払わず強制労働をさせる，漢字を見ると懲罰を与えるなどの事件が生じたという。これに耐えかねたサンガウレドの青年たちは，サラワクの活動家の下で，軍事訓練を施されていた［林 2010: 69］。サンガウレドでは，当地の華人たちが積極的に関わり組織化されていたようである。また，サンガウレドやブンカヤンという地域は，共産主義思想の地元住民の華人に対する普及が根強く，彼らへの支持を明確に表明する地元の青年も多かった。彼らとサラワクのゲリラ，インドネシア共産党勢力は一丸となって反スハルトの運動を継続するだけのある程度の力量を持っていたということであろうか。

1967 年 4 月，西カリマンタンの指導者ソフィアンは，新たな西カリマンタンでの拠点を作ることを構想した。そして，ブンカヤンの近くの山を根拠地として，そこを火焔山（Gunung Bara）と名付けた。このいきさつは次のようである。1967 年 4 月 6 日，林によれば，ソフィアンと副指揮の陳は，サンガウレドにて，サラワク人民遊撃隊を率いる林和貴と黄紀暁と相談し，一致を見た。1967 年 4 月 16 日，ますますスハルト政権による反華人の影響力が強まる中，ソフィアンは，火焔山にて，西カリマンタン華人に関する政策を発表した。それは，「西カリマンタン華人団結せよ，連合サラワク革命者の武装闘争に」というものであった。そして，これで人々の支持を募ったのである。1967 年 5 月 1 日，ソフィアンの指示で，火焔山で議論して，方針を定めた。まず西カリマンタンサラワク連合部隊「火焔山部隊（pasukan gunung bara）」の成立と火焔山基地の成立である。軍事方面については，サラワク側が面倒を見るということ，つまり軍事訓練はサラワクゲリラが施すということ，宣伝部の結成などであったという。ここではサラワクのゲリラの下で，軍事訓練が行われていた。このようにして，本拠地をブンカヤン近くに彼らが名づけた火焔山という山中に根拠地を持つ火焔山部隊が成立したのである。

6-2.　9・30 事件以降の西カリマンタンでの士気の高まり

西カリマンタンの活動家については，その多くが，実は 9・30 事件以降に，華人の学校が全面的に閉鎖され，そして，スハルトの圧政が顕在化していくなかで「反スハルト」を掲げて立ち上がったという特殊な来歴を持つことも注目に値する。9・30 事件以降，ジャワでは下火になる一方の共産主義運動の中で，この地域ではそれ以降，彼らの活動が盛り上がるからである。何人もの活動家たちが［林 2010］の中に回顧録を載せているがその中からいくつか実例をここで記述する。

ブントロという西カリマンタン出身の人物は，9・30 事件発生直後，最初何が起きたか分からなかったが，しばらくして彼自身も投獄されることになる。拘留されて数か月で釈放され，その後実家にいたところ，遊撃隊に参加しておりサラワク遊撃隊の協力も得て活動しているということを友人から聞き，攻撃の時を待っている火焔山基地に行き，そこで遊撃隊の活動に加わったのだという[28]。

[28]［林 2010］中のブントロ（文多羅）の回想録（pp. 147–182）による。

他の遊撃隊に関わったポンティアナック出身の人物は，「1963年にポンティアナックの高校卒業後，同級生たちの半分ほどは中国に帰ることを考えていた。その時，ある同級生が，「君はインドネシア生まれだろう，インドネシアに残って，インドネシア国家の建設に努めようではないか」と言った。私はその時，「私は中国に帰りたい，祖国の社会主義建設に関わるのだ，それが私の一番の願いであり理想である」と言った。その同級生は「中国は，すでに発展している。中国はますます強大になっている。しかし，我々が生まれたインドネシアは，独立から今に至るまで貧困で弱小であり，我々華人の力を求めている。我々の祖国インドネシアの建設に参加しようではないか，中国に帰っても良いことがあるとは限らない。一緒にここに残ろう。祖国とインドネシア人民は君を必要としている」と言われた。私の父母は，私が中国に行くことに賛成していた。私もそのようにしたいと思っていた。しかし，いったん私の生まれ故郷とここで生活している同胞たちを考えると，ここに残ることを決心していた。この後，私のインドネシアの政治動向について知ることになった。華人には左翼進歩政党に関わることしか選択肢はなかった。私は政治活動が楽しかった。歌の活動，学習活動には全部参加した。この進歩思想の影響下で私は，革命の一分子となった。1965年9・30事件が発生した直後，まだこの重要性について分からなかった。私と友人たちは，シンカワンの映画館にあそび，またダンスを見物していた。数日後，様子が変なことに気付いた。どうも左派が弾圧されているようである。華僑総会，華僑の学校関係などは軍部に届け出をしなくてはならなかった。また監獄に入れられた人たちもいた。このような状況下で我々若い世代は地下活動に入っていった[29]。

最後の一例であるが，この人物が書いているところによると，「1962年に，よく老人から当時の世界情勢について話を聞いていたが，その中に『インドネシアの華人は中国と強いつながりがある。現在，アメリカはすでにパキスタン，インド，タイ，ベトナム，フィリピン，台湾，日本などに軍事基地を持っているが，目的は我らが祖国中国を包囲することである。われわれはインドネシアが中国の朋友であるようにしなくてはならない。インドネシアをアメリカに明け渡してはならないのである』という話があった。私はインドネシア生まれで，私は私の祖国インドネシアを愛している。ただ，中国もまた私の祖国なのである。それでこのような話は腑に落ちるものであった。1965年9・30事件が起こった後，スハルトの軍事集団は，正義の人士に対して弾圧を加え，彼らを逮捕していった。華僑の学校と中華総会は閉鎖された。華人に対する迫害も強まっていった。このような非人道的な反華人，華人排撃事件を見て，我々若い人々は義憤に駆られた。これは我々インドネシア華人が被害にあっているものである。スハルト政権は華人に対して不平等な政策を取り続けている。これを何とかするために，1968年に火焔山部隊に参加した[30]。

このように，9・30事件以後，ジャワなどで息をつく暇もなく，反共産主義の嵐が吹き荒れる中で，西カリマンタンではそのような政治家の不正に対して「義憤」を感じて政治闘争に邁進するということが可能だったのである。

6-3. サンガウレド空軍基地襲撃

火焔山部隊（サラワクゲリラ，インドネシア共産党西カリマンタン支部の連合部隊）は，1967年

[29]［林2010］中の和平（筆名）の回想録（pp. 184–187）による。
[30]［林2010］中の兆昌（筆名）の回顧録（pp. 188–190）による。

7 月 13 日のこと，同月 17 日にインドネシア軍の上層部の人がサンガウレドの基地を訪れるという情報を入手した。6 月から継続している基地の派閥争いの裁断を上層部に仰ぐという理由であった。その間，武器などは，倉庫に格納されることになっていた。それを狙って武器弾薬を奪おうという作戦が計画された［林 2010: 70］。

これがそれまで力量を温存してきた，サラワクゲリラと西カリマンタン共産党の共同部隊による攻勢であり，一挙にその存在が姿を現したということになる。この事件はインドネシア国軍に衝撃を与えた。その後，ますます国境地域ブンカヤン，サンガウレドでのゲリラ掃討作戦が過激化し，多数のゲリラとインドネシア国軍兵士が戦死している。

彼らは以前より，内陸部の華人，ダヤク人に働きかけ，彼らの革命への自覚と協力を高めさせようと努力していた。当時の彼らは，サラワクゲリラの支援を受けて軍事訓練は行うが，基本的に平和的路線を取っていた。ところが，9・30 事件以降，ジャワでインドネシア共産党が壊滅状態になり，また「スハルト政権の（彼ら自身の表現を用いれば）「抑圧的な，排華，反共産主義」の姿勢を知った彼らは，サラワクゲリラとの本格的な共闘の路線を模索し，反スハルト政権を掲げて武力闘争を展開することになる［林 2010: 70］。

そしてサンガウレド攻撃が始まるのである。これに参加した林世芳によれば，彼らがはたらきかけをしている西カリマンタンの人々による武装闘争には武器が不足しているために，インドネシア軍基地を襲撃して武器弾薬を奪う挙にでたのだという。林は次のように回顧している。

> 1967 年 4 月，サラワクゲリラの指導者，林和貴，黄紀暁（後のスリアマン行動で中心となる黄紀作の実弟），西カリマンタン共産党関係のソフィアン，陳武侠，王明が協力し，革命武装闘争を展開する準備を行い，その根拠地をブンカヤン近くの火焔山（gunung bara）におき，自分たちの部隊を「火焔山部隊」と名付けた。
>
> サラワクとの国境近くに位置するサンガウレドの華人はサラワクの革命者の影響を受けており，スハルトの反共・反華人的な生活に不満を持っていた。
>
> 彼らは，1967 年 4 月より民兵としてサラワクゲリラの訓練を受けていた。1967 年 7 月 13 日，我々はインドネシア軍のリーダーが 7 月 17 日にサンガウレド飛行場に視察に訪れるという情報を入手した。これに合わせて戦闘開始ということが会議で決定された。革命闘争においてもっとも重要なのは，人民群衆の蜂起であり，遊撃隊にはそのための銃が決定的に不足していた。これが武装闘争の主要な問題であった。［中略］ 7 月 16 日午前 2 時，我々戦闘隊員は，サンガウレド空軍基地に潜入し，50 丁のライフル銃，50 丁のピストル，数十箱の弾薬を奪った［林 2010: 69–71］。

実際に急襲した部隊はそれほど多くなく，彼らだけでどのように奪った弾薬などを輸送したかというと，やはり，地元の華人あるいはダヤク人が関わっていた可能性が濃厚である。

想像以上に，当時の西カリマンタン華人は，サラワクと西カリマンタン双方の共産主義活動に共鳴して，彼らを積極的に支持していたのかもしれない。現在まで筆者が行ったインタビュー調査では，直接に自らが共産主義運動に関わったという西カリマンタンの地元住民の証言は皆無であるが，これ

はスハルト体制期から現在に至るまで，インドネシアにおいては共産主義に関わっていたということが，社会的に当人に不利益を与えるために彼らが口を閉ざしている結果であり，事実としてはかなり多くの華人が直接間接に共産主義ゲリラの活動を支持していたのではないだろうか。

サンガウレド襲撃事件はインドネシア軍に衝撃を与えた。デイヴィッドソンとカンメンによると，その後スハルトはすぐにジャカルタにて西カリマンタンの軍指導者と会合を持ち，この後の西カリマンタンのゲリラ追討作戦についてどうするかを協議している。そして 8 月初めには，インドネシア国軍は，陸軍空挺部隊（Resimen Para Komando Angkatan Darat, RPKAD）というパラシュート特殊部隊をこの地域に導入した［Davidson dan Kammen 2002: 62–63］。この DPKAD であるが，のちに特殊戦略部隊（Komando Pasukan Khusus, Kopassus）と名前を変え，この部隊は後に東ティモール侵攻（1975 年）と軍支配，アチェの独立闘争鎮圧に関わったスハルト政権にとって重要な役割を持つ特殊部隊である。総力を挙げて，ゲリラを掃討することが至上命令となったことが分かる。

この 1967 年 6 月のリャクドゥ更迭の後，シリワンギ師団を率いたのがウィトノであった。デイヴィッドソンによると，彼は地域の華人社会に警戒し，次のように軍の内部文書に書いていたようである。「現在，我々の敵は明確な一つの民族集団（satu etnis sendiri）であり，彼らは独自の社会と我々には理解できない言語を持っており，これが我々の諜報活動を困難にしている」［Davidson and Kammen 2002: 63］。これは当時，ウィトノ率いるインドネシア国軍が華人という民族集団全体に対して敵対心を抱いていたことを反映しているだろう。

6-4.　8・30 部隊

1967 年 8 月がもっとも西カリマンタン州における共産主義勢力が勢いを増した時期であり，また頻繁にインドネシア国軍と彼らの間での戦闘が起こった時期であった。この時期にさらに，彼らは組織化を試み，構成員をインドネシア共産党員，地元ブンカヤンの青年，サラワク遊撃隊からなる 8・30 部隊が文字通り 1967 年 8 月 30 日に結成された。そのいきさつは次である。1967 年 8 月 30 日に，ブンカヤン周辺を統括していた陳武侠（インドネシア共産党西カリマンタン支部の副指揮）は，8 月 30 日にブンカヤンで 8・30 部隊を設立し，彼自身が指揮をとった［林 2010: 77］。

この時に民衆工作，民衆動員で活動していた李松源（インドネシア名 Sulaiman）は，既にここで活動していた。ますます参加する地元民は増えており，そしかも，皆はスハルト体制が残酷な手段で共産主義者，華人に弾圧を加えていることを知っていた。それで，その当地の青年たちは彼らの活動に直接参与した。遊撃隊としても，この地域（ブンカヤン，サンガウレド）が「紅色区」であることを知っていて，人員を増強した。そして 1967 年 8 月 30 日，ソフィアンらは，火焔山からブンカヤンに赴き，午後 2 時，80 名ほどで 8・30 部隊の成立式典を行った［林 2010: 82–84］。この当時の地元住民の支持を表す資料には次のような回顧録がある。

> 8・30 部隊成立時には，まだまだ我々に有利であった。というのは，ブンカヤンのような共産主義の考え方が強いところであれば，どの村にいっても，豚や鶏を屠って，我々を接待してくれたからである。これは地元の兵士の計らいであった。我々は食べるもの，着るもの，住むところ，何も心配しなくてよかったのである。我々が到着する前から村々では，食事が湯気を立てて待っ

ていたのである。1967 年 8 月 30 日夜，群衆を集めて集会があった。その時に住民代表は「みなさん，見てください。彼らは，故地では何不自由することはありません。しかし彼らは，それをすべて捨てて，我々の革命に参加しに来ているのです。彼らは犠牲を惜しみません。彼らのような人から我々は学ばなくてはなりません。家庭のぬくぬくした生活を思うのはやめましょう。ここに優れた部隊が成立しました。これは，我々の故郷を守るための部隊です」と演説した[31]。

ここに見られるように，当時，内陸部においても地元住民の共産主義ゲリラに対する支持には並々ならぬものがあったのではないだろうか。これが現在の聞き取りではまったく聞かれないとしても，である。インドネシア国軍がゲリラ掃討のために，内陸部の華人を根こそぎ追放し，西沿岸部の大都市に集住させて監視する必要を考えたというのもこのような状況であれば納得できるものである。1967 年 10 月に，この国軍の構想は実施され，内陸部から多くの華人が追放されることになる。

1967 年 10 月のダヤク人を利用した華人追放事件について，林は，これが西カリマンタンとサラワクの連合ゲリラが群衆の支持を失う実質的な契機となったと書いている［林 2010］。彼らにとっての決定打は 9・30 事件ではないというのである。9・30 事件はサラワクゲリラの活動家が理念的に描くようには西カリマンタンの地政学的理由から，それほど直接的な影響力が無かったのではないだろうか。その後も彼らは内陸部でそれまで同様に現地の華人の支持，援助を得られたのであるから。ところが，1967 年華人追放事件によって，いよいよゲリラは進退窮まることになったようである。彼らの言によれば，「食糧の来源も失うことになった」［林 2010: 85］。火焔山一帯の華人住民は追放され誰ひとりいなくなり，食糧が尽きて何でも食べたという。ブンカヤンとサンガウレドの被害は特にひどく，地元の華人は追い立てられ，それまで華人が持っていた胡椒園やゴム園には誰もいないという状態であったという［林 2010］。このようにして彼らの活動は原動力たる住民の支持を失ったのである。1967 年の事件の後，1968 年にはインドネシア軍との戦闘の中で多くの戦闘員が命を落とした。このような西カリマンタン情勢に失望し，サラワクゲリラは自国に引き上げていく。1969 年初めには完全に，西カリマンタンとサラワクの共産主義勢力の協力関係は途絶える。これはインドネシアの軍人からしてみれば 1967 年の大規模な軍事作戦は功を奏したことになるだろう。

6-5. 共産主義運動の壊滅

1967 年華人追放事件の後，サラワク，西カリマンタンの運動は大打撃を受け，その後の協力関係も解かれ，サラワクゲリラはサラワクに戻った。その後取り残された西カリマンタンの組織は真剣に活動の方針を練って活動していた。ソフィアンらは，内陸部での活動がますます困難になったため，華人が多く流入した西沿岸部に活動の場を移した。当時共産主義ゲリラ活動に参加したシンカワン郊外のカリアシン（Kali Asin）に居住する Phiong Lip Kiu によると，1970 年にソフィアンたちの部隊の活動に関わったのであるが，その活動員の募集方法は次のようであった。彼らは散髪屋や指圧師を装って現地の華人に接近したという。彼らは家を一軒一軒訪れていた。この Phiong Lip Kiu は，もともとムンジャリン（Menjalin）に住んでいたが，1967 年の華人追放事件に遭遇し，ポンティアナッ

[31]［林 2010］中のブントロ（文多羅）の回想録（pp. 147–182）による。

ク近郊のシャンタンに住んだ後（この地域はいまでも 1967 年にに内陸部から追放された難民が多く居住する地区である），避難先でソフィアンたちの部隊と関わるようになったという[32]。

このように内陸部には勝算がないため，結局軍部の思うように，ゲリラの活動範囲も内陸部から都市部に移動したのである。この意味でも軍部の当初の目的は達成されたと言えるだろう。

1973 年，ソフィアンの部隊は反スハルト政権と共産主義支持をアピールする標語ポスターを沿岸部各地の家屋に貼る運動を行った。これによって，彼らの存在がインドネシア国軍に暴露され，この作戦は現地の華人の賛同を得るどころか，彼らの摘発の時期を早めることになってしまった。この部隊に参加した林世芳は，当初よりこの方針に反対であったが，結局メンバーの大勢はこれに賛同したという。その結果その年に多くの共産党員がインドネシア国軍に逮捕され，翌 1974 年，ソフィアンは捕えられて処刑された［林 2010: 108］。

インドネシア側では，集中キャンプが作られ，政治犯たちはシンカワンおよびポンティアナックの集中キャンプに収容された。彼らが釈放されたのは 1978 年以降である。ポンティアナックの集中キャンプには，政治犯とサラワクゲリラの隊員が収容されていたという。その後，彼らの身柄はサラワク政府に引き渡された。多くのゲリラ活動家は，集中キャンプの中で大変不衛生で，食糧もまともに与えられない苛酷な生活を送ることになったのである［林 2010: 54–55］。

サラワクゲリラとしては，9・30 事件以降の再起をかけた 1967 年の基地襲撃の後，ダヤク人を用いた徹底的なインドネシア国軍の攻勢に遭い，その後，華人の支持を得られない西カリマンタンでは以前のように自由に活動はできなくなった。この点を鑑みても，1967 年華人追放事件のサラワクの活動家たちへの影響は確実に大きかったと言える。その後，彼らはサラワクを本拠地に活動するのであるが，マレーシア軍との局地的な戦争では勝利するものの，圧倒的に大勢は不利になり，結局 1973 年のスリアマン行動を迎えてしまうことになるのである。

6. 結論

北ボルネオ，ブルネイ，サラワクが連合して，イギリス新植民地主義から独立した政体を築くという構想を背後でもっとも強力に支えていたのは，マレーシア対決政策を取るインドネシアであった。特にこの運動が激烈であったサラワクにおいては，インドネシアの支持を背景に活動が展開し，これを支持する人々が多かった。9・30 事件以降，その影響が西カリマンタンにおよび，完全にスハルトの指揮系統のもとに置かれるには時間を要した。しかし時間はかかっても，それは確実に成し遂げられた。9・30 事件をもって，もはや構造的にはインドネシアにおける共産主義勢力は絶望的状況に陥り，その影響は必ず彼らの活動に及んでくることは明白となった。しかしながら、当時の不安定な政局の中でサラワクゲリラは西カリマンタンの共産主義勢力と共闘することで逆に活発化した。確かに、国際情勢はますます彼らの活動に不利に傾いて行ったものの、それがマレーシアとインドネシアという国家の「辺境」地帯で活動する彼らに直接的な影響を与えるまでには時間を要したのである。

1967 年 8 月，つまりインドネシア軍とマレーシア軍が一致団結して共産主義ゲリラ掃討に取り組むようになってから，ポンティアナックとクチンに相互に警察，軍人が駐在することになった［Tan

[32] Phiong Lip Kiu へのインタビュー，カリアシン，2012 年 7 月 6 日。

2008: 262]。インドネシア，マレーシアの軍人は，相互にお互いの国に自由に越境できるようになった。マレーシアの軍人はインドネシアのバティック（batik，インドネシアの伝統工芸品のろうけつ染めの布，それで作った衣類）を土産に持ち帰り，インドネシアの軍人は，故地では希少な缶詰をクチンから土産に持ち帰るということが可能になったというエピソードをガブリエル・タンは紹介している［Tan 2008: 262］。このようなことは 9・30 事件以前にはありえず，9・30 事件後に西カリマンタンの軍配置の総入れ替えが終わってから可能になったものである。その後，インドネシア軍とマレーシア軍の協力による内陸部からの華人追放政策が 1967 年に展開されるのである。サラワクゲリラは，リーダーもサラワクに戻れなくなり，これは内部分裂をもたらした。そして 1974 年のスリアマン行動で大半が投降し，残りは 1990 年までゲリラ戦をするがもはや勝ち目のない闘争となったのである。

最後に，冒頭に挙げた 3 つの問いに従って本論での議論を総括する。

まず，①サラワクの独立政体を目指す運動の背景についてである。1950 年代からサラワクでは脱植民地化の動きが起こるが，彼らはイギリス主導のマレーシア連邦案に反対であり，1963 年の連邦成立後もこれに反対して，インドネシアの支援を求めてサラワクと隣接する西カリマンタンでも，イギリスからの完全な独立，独立政体の樹立を意識して森林に潜んでゲリラ活動するようになった。彼らの活動において，9・30 事件以前も以後も西カリマンタンという地域の重要性は，本論に見たように大きかった。

次に② 9・30 事件がサラワクの共産主義ゲリラの運動にどのような影響を及ぼしたのか，および③ 9・30 事件でスカルノという強力な支持者を失った後も彼らの活動が比較的長い間継続したのはなぜか，という問いに対する答えを簡潔に整理しよう。彼らは 9・30 事件以降，もっとも期待していた後ろ盾，スカルノを失っていく。しかしながら，これは 3 つ目の問いと関連するが，当時まだ状況は流動的であり，彼らはスカルノ政権の復興と，スハルト排除を掲げて運動を展開していた。その主な舞台は，マレーシア政府による取締りが厳しくなるサラワクよりも，スハルトの勢力が及んでいなかった西カリマンタン内陸に移動した。9・30 事件以降，インドネシアの中でも政治の中枢に近いジャワ，バリにおいては短期間の間に共産主義勢力は絶滅するのであるが，西カリマンタンではまだまだ存続の余地があったのである。また地元の共産主義思想の影響を受けた華人の支持が得られるというのもサラワクゲリラにとっての西カリマンタンの魅力であった。そして，サラワクゲリラは西カリマンタンに活動の場所を求め，インドネシア共産党西カリマンタン支部（共産党残存勢力）は，サラワクと共闘することで活路を見出そうとする「相互依存関係」が成立した。これはこの地域独特の地政学的な特徴があってのものであったと言えよう。

そのようにして彼らの活動は継続したのであるが，これにとどめをさしたのは 1967 年 10 月に起きたインドネシア軍人に教唆された現地民のダヤク人による内陸部からの華人追放事件であった。西カリマンタンおよびサラワクの共産主義活動に致命的な打撃を与えたのは，9・30 事件ではなくこの 1967 年華人追放事件であった。この後現地の華人住民の支持も得られなくなり，サラワクゲリラはサラワクに退却し，マレーシア政府と対峙し 1973 年に大部分が投降する。また，西カリマンタンの活動も同時期の 1974 年のソフィアンの死亡をもって消滅することになる。しかしながら，インドネシアの中で，1974 年まで，共産主義活動が継続した地域は西カリマンタンの他にはない。確かに 9・

30 事件の影響はあったものの，しかしながらそれが決定打となることはなかったというのはこの地域の特色を表しており興味深いものである。

本稿は，公益財団法人りそなアジア・オセアニア財団国際交流活動助成による研究成果である。

史料

回想録

蔡存堆『怒海揚帆：砂共史初探』詩巫聯成印務公司，2000 年。
幹東『砂拉越左翼運動史』優勝印務公司，2009 年。
莉雲『懐念』天馬出版有限公司，2003 年。
林世芳『西加風雲』Malaysia, Sarawak, Bintulu: 砂隆印務有限公司（Sadong Press Sdn. Bhd.）
盧友愛『燃焼的歳月（友誼叢書之十）』砂隆印務有限公司，2009 年。
盧友愛『漫漫求索路：北加里曼丹革命四十年探討 1950–1990』北加里曼丹革命四十年探討編委会，2012 年。
羅丁『砂印辺界風雲（友誼叢書之五）』詩巫聯成印務公司，2003 年。
王一心『我們回家：新中国初期華僑帰国記』山東人民出版社，2013 年。
揚帆『斯里阿曼行動始末』砂隆印務有限公司，2010 年。
Hendropriyono, A. M., *Operasi Sandi Yudha: Menumpas Gerakan Klandestin*. Jakarta: Kompas, 2013.
Tan, Gabriel, *Indonesian Confrontation and Sarawak Communist Insurgency 1963–1966: Experiences of a Local Reporter*, Kuching: Penerbitan Sehati Sdn. Bhd., 2008.

シンポジウム資料

砂拉越華族文化協会・詩巫省華人社団連合会・砂中区友誼協会・詩巫新聞協会「砂拉越参組大馬 50 年検討会」2013 年 12 月 21 日。

新聞

星洲日報「新村今昔系列」2001 年 8 月 7 日，8 日，9 日。

インタビュー

盧友愛（元北カリマンタン人民軍），シブ，2013 年 12 月 21 日。
愈詩東（元北カリマンタン人民軍），シブ，2013 年 12 月 21 日。
謝水源（元北カリマンタン人民軍），シブ，2013 年 12 月 22 日。
黄莫華（元北カリマンタン人民軍），シブ，2013 年 12 月 22 日。

研究書

日本語
岩見元子「マレーシア，サラワク州の投資環境」『海外投融資情報財団レポート』2012 年。
木畑洋一『帝国のたそがれ：冷戦下のイギリスとアジア』東京大学出版会，1996 年。
鈴木陽一「マレーシア構想の起源」『上智アジア学』16: 151–169, 1998 年。
鈴木陽一「グレーター・マレーシア 1961～1967：帝国の黄昏と東南アジア人」『国際政治』126: 132–149, 2001 年。
鈴木陽一「マレーシア形成と対外政策の最新研究動向」JAMS News, 第 25 号，2003 年。
鈴木陽一「スルタン・オマール・アリ・サイフディン 3 世と新連邦構想：ブルネイのマレーシア編入問題　1959–1963」『アジア・アフリカ言語文化研究』89: 47–78, 2015 年。
首藤もと子『インドネシア：ナショナリズム変容の政治過程』勁草書房，1993 年。
田村慶子「マレーシア連邦における国家統一：サバ，サラワクを中心として」『アジア研究』35(1): 1–44, 1988 年。
田村慶子『多民族国家シンガポールの政治と言語：「消滅」した南洋大学の 25 年』明石書店，2013 年。
原不二夫『未完に終わった国際協力：マラヤ共産党と兄弟党』風響社，2009 年。

松村智雄「1967 年「ダヤク示威行動」におけるインドネシア西カリマンタン州ダヤク社会のポリティクス」『東南アジア歴史と文化』44: 45–63, 2015 年。
村井寛志，東條哲郎「マレーシアのゴム農園地域における華人新村の形成と住民生活の編成：マレーシア・ヌグリスンビラン州マンバウ新村の事例から」神奈川大学紀要，2011 年。
山本博之『脱植民地化とナショナリズム：英領北ボルネオにおける民族形成』東京大学出版会，2006 年。
英語
Cheah, Boon-Kheng, "The Communist Insurgency in Malaysia, 1948–90: Contesting the Nation-State and Social Change," *New Zealand Journal of Asian Studies* 11, 1: 132–152, 2009.
Davidson, J. S. and Douglas Kammen, "Indonesia's Unknown War and the Lineages of Violence in West Kalimantan." *Indonesia* 73: 53–87, 2002.
Easter, David, *Britain and the Confrontation with Indonesia, 1960–66*. London: Tauris Academic Studies, 2004.
Ishikawa, Noboru, *Between Frontiers: Nation and Identity in a Southeast Asian Borderland*, Ohio: Ohio University Press, 2010.
Jones, Matthew, *Confrontation in South East Asia, 1961–1965*: Britain, the United States and the Creation of Malaysia. Cambridge: Cambridge University Press, 2002.
Mackie, J. A., *Konfrontasi: The Indonesia-Malaysia Dispute, 1963–1966*. London: Oxford University Press, 1974.
Porritt, Vernon. L., *The Rise and Fall of Communism in Sarawak, 1940–1990*. Monash University Press, 2004.
Tanasaldy, Taufiq, 2012, *Regime Change and Ethnic Politics in Indonesia: Dayak Politics of West Kalimantan*, Leiden: KITLV Press.
Subritzky, John, *Confronting Sukarno: British, American, Australian and New Zealand Diplomacy in the Malaysian-Indonesian Confrontation, 1961–1965*. London: Macmillan Press, 2000.
中国語
劉子政『砂羅越五十年代史事探微』慕娘印務有限公司，1992 年。